

観世織部清尚三男の宝生大夫友勝

表章

観世鏡之丞家の初代は、十五世観世大夫元章の弟で宝暦2年(一七五二)に幕府から分家樹立を認められた観世織部清尚である。安永3年(一七七四)に兄の元章が没した後、元章養子の章学(アキノリ)が一週間だけ観世大夫を務めて隠居した直後に十七世観世大夫となった。明和改正謡本を廃止するなど、元章の行き過ぎた改革運動の収束に苦勞している。

その清尚の長男が十八世観世大夫となった織之助(後に織部)清充、次男が分家の二代目を継いだ鏡之丞清興である。兄の清充が寛政5年(一七九三)に観世大夫を引退したため清興が本家を継いで十九世観世大夫となり、織部と称した。分家の三代目は後に清興の次男の鏡之丞清宣が継承している。

清尚には十八世清充・十九世清興の他に男子がもう一人いて、宝生家の養子となり、宝生大夫を継いだ。宝生九郎友勝である。

宝生大夫家は室町時代の系譜が不明で、七世観世大夫元忠(宗節)の弟が養子となつて継承した以降の歴代の経歴の大筋がようやく把

握できるだけである。従つて友勝が何代目の

宝生大夫か明言できないが、世阿弥の弟蓮阿弥なる架空の人物を始祖とする幕末編の『宝生系図』に従えば、観世大夫元忠の弟が五世宝生大夫で、友勝は十三世である。五世の实质子が観世の養子になつたため金剛大夫の弟が六世となり、七、十世は実子が家督を継いだ。十一世は脇方宝生新次郎の三男、十二世は金剛大夫の次男、十三世は観世大夫の子、十四世は加賀藩に仕えた宝生分家の当主が相続したから、江戸中期の宝生大夫家は血縁の薄い家系だった。そのため当時の宝生大夫の経歴には不明な点が多く、十二世友通も安永4年(一七七五)7月18日没ながら享年が不明確で、能楽資料集成『重修猿楽伝記』所収の天保12年(一八四一)編(宝生家代々)には「参拾余才」とある。また壮年で、養子を定める必要も感じない段階での急死だったらしい。

その友通の後嗣の十三世宝生大夫友勝について、前述の『宝生系図』は、「多門・九郎。実は観世織部三男。幼年ニ而継ニ養父業ニ同姓

英勝後見タリ。…十七年保家寛政三辛亥十二月卒」と注する。観世大夫家系図としては最も詳細な『観世累葉家譜』が、清尚の子として、三男清興の後に「鍋太郎 清尚男号ニ多門一後宝生九郎…」と掲げるのが、宝生の伝えと一致し、初名が鍋太郎なのであった。清興が三男なら鍋太郎は四男になるが、清興の兄(清充の弟)で宝暦13年(一七六三)に夭折した「九蔵」を除けば、清興が次男、鍋太郎が三男になる。宝生の伝えはその立場らしい。

この宝生友勝の経歴について最も詳しいのは、管見では『重修猿楽伝記』の(宝生大夫家由緒書)で、次のような事を述べている。

a 徳川家治時代の安永4年10月10日到家督相続を認可され、成長まで宝生弥五郎が後見を勤めるべきことを命じられた。

b 天明元年(一七八一)8月13日に奥能に召し出されて(鷲)を勤めた。

c 天明2年12月13日に袖留(半元服)し、翌年後見を離れて「宝生大夫」と名乗った。

d 天明2年3月4日に、奥能で「芦刈」を演じた。願い出での出演であった。

e 天明4年5月14日に前髪執り(元服)と九郎への改名を認可された。

f 天明5年1月3日に謡初に初出勤した。

g 同年3月7日に(石橋)を、同年5月28日に西丸で(望月)を勤めた。

h 天明7年の徳川家斉將軍宣下祝賀能に出勤し、四日目に(乱)を演じた。

i 寛政4年(一七九二)1月20日に病死した。

養子になった年月への言及がなくていきなり家督相続の事から書き出しているが、恐らくは末期養子の形だったのであろう。bは非公式の催しらしくて『触流し御能組』に記載がないが、d f g hの出演記録はみな同番組で確認できる。iの没年月日が『宝生系図』や『観世累葉家譜』が前年12月(25日)とするのと異なるのは、実際には年末に死亡したのを、正月を過ぎて届け出たためであろう。急死で後継者未定だったためだろうか。

残念なのは年齢が明確になる記事がないこととで、この由緒書自体が友勝の正確な年齢を知らぬままに書いているらしい。生年不明の点が友勝の経歴での最大の疑問なのである。

しかる所、梶井幸代・密田良二著『金沢の能楽』(昭和四七年 北国新聞社)の一三二頁に「宗家では、友通の死後、観世清尚の三男多門が十二歳で後嗣となり」との記事があることに、十年ほど前に気づいた。家督相続を認可された安永4年に数え12歳なら、生れは明和元年(一七六四)、28歳の寛政3年(一七九二)に没したことになる。典拠を示しておらず、元服した天明4年に21歳になるのも不審だったので、信用はしなかったが、加賀藩関係の資料に要注意との感じは抱いていた。

平成10年に東京の文学堂の古書目録に出て落合博志氏蔵となった「宝生流能伝書」は、能の故実説や曲名名寄の類や謡伝書などが混在する江戸末期の写本で、誤写は多いが有用な書である。宝生分家を当家の能大夫とする

記事などから、加賀藩関係の本に基づくと認められる。首部に「宝生家代々之由緒」と題する記事があり、元祖蓮阿弥からの歴代の名を連ねて少々の注記を加えた末尾に、「多門」の名もあり、それへの注記に左の如くある。

実は観世大夫五男、故九郎養子トス。七才ニテ家督ス。幼少ニ付宝生弥五郎後見仕。十六才ニテ初於ニ殿中ニ鷲能相勤ム。天明四年五月十七日十八才ニテ元服仕、九郎ト相改ムナリ。

「五男」は「三男」の誤写であろう。家督を相続した安永4年に7才ならば、(鷲)を舞った時は14才、元服した天明4年には16才のはずで、記述に二年の齟齬があるが、月日まで明記した正確な伝えらしい元服の時に18才だったとの記事が正しく、家督相続は9才の時の可能性が高いのではなからうか。それならば、生れは明和4年で兄の清興より6才年下になる。間に二人の女子がおり、自然な年齢差である。没した寛政4年には26才である。誤写や齟齬を含む資料なので絶対確実とはいえない推測であるが、従来の難題の解決に資する貴重な資料を紹介し、宝生九郎友勝の生年について推定してみた。

以上、早世して格別の業績は残さなかったが、上掛り両流交渉史の面で注目値する、鏡之丞家出身の宝生大夫の経歴を考察した。彼に嗣子はいなかったようで、後見した宝生弥五郎が大夫を嗣いでいる。(05・3・8)

(法政大学能楽研究所前所長)